

7 青年との対話

私は郷里に芳友会、東京と大阪に雄心会という青年の集りをもつておるが、次の数片はその機関誌に寄せた私の断想である。

一 友情

人の一生には、悦びもあれば憂えもある。得意にふくらむ朝もあれば失意に沈む夕もある。栄光を浴びる舞台もあれば、辱しめに耐えなければならぬ局面もある。

禍の根はおうおうにして得意の時に生じ、福の種は隱微の間に蒔かれることが多い。栄光は嫉視を招きやすく、恥辱は人生の深淵をのぞき見る機縁ともなる。愉悦と悲哀、得意と失意、栄光と恥辱、それらは別のものではなく本来一如であるといえよう。

この人生の浮沈と哀歎を貫ぬいて、われわれを支え励ましてくれるものは、名声でもなく地位でもなく、財産でもない。それは至純な友情である。

友情の本体は、お互いの尊敬に根ざした理解と献身というものである。われわれの人生を底の底まで分解究明すれば、友情という中核体につき当るものである。

私は親愛なる芳友会の諸兄姉が、終始渝らない至純にして強靱な友情を絆として、お互いの日常生活を充し、お互いの人生をそれぞれの立場において、傑作たらしめることに精進されることを祈つてやまない。それがそのまま国家と郷土のためになり、諸君をめぐる社会の支えとなることを確信するからである。

(昭四〇・七・一〇)

二 民主主義 マッチーニの言葉

民主主義という言葉は大変調法なものである。洋の東西、思想の左右を問わず、急進的な変革を意図するものも、穩健着実な前進を願うものも、攻撃するものも守るものも、一様に民主主義という言葉をも、自分の味方にすることを忘れないようである。

何でも学者によると、民主主義という言葉の定義は六百幾つもあるそうで、わかったようではない、えたいの知れない言葉ではある。このようなことでは民主主義の神様が戸惑つておるにちがいない。そう勝手に使われては迷惑だといつておられはしまいか。

イタリアの哲人政治家にマッチーニという人があり、その正しい主張のゆえに獄死された人である。この人は「民主主義ということは最も賢明な指導の下における、すべての人によるすべての人のためになる善をいうのだ」と喝破しておられる。

人間というものは、労苦よりも安逸を求め、生活の低きよりも高きを求めたがるものである。政治がこの人間の本能に迎合して、その御機嫌をとるばかりでは、その人のためにならないばかりか、国家と社会を滅亡と破壊に導くことになる。その破局を避けるためには、人に真実を訴え、困難を説き、それ相当の犠牲を求めなければならない。このことがマッチー二のいう賢明なリーダーシップというものではあるまいか。

(昭四〇・九・一〇)

三 アデナウアーの述懐

西独の前首相アデナウアー氏は、このほど九十歳の誕生日を迎えてこういつている。

「私は、九十年の生涯を回顧して、私に与えられた義務に、私自身がともかくも忠実であったことを誇りに思っている。」

ナチの暴圧に抗して闘った、前半世の筆紙に尽せない苦闘の思い出や、瓦壊した祖国の首相としてその再建に成功した後半世の光輝ある記録よりも、一個の公人として、また一人の私人として、アデナウアーは自分の人生を、自分に与えられた義務に果して忠実であったかどうか、という物さしで計っておられるのだ。われわれは、われわれの家庭に対し、社会に対し、あるいは公共同体や国家に対し、それぞれ独自の義務をもつておる。そしてこの与えられた義務を、何とか

して果すことが、人間の生活に意義を与えることであるとともに、人間としての最少限度の責任である。名譽や名声、地位や財産等というものは、この最少限度の責任を果して後、はじめて期待し得るアクセサリーに過ぎない。そうでないと、それは虚名ともなり、淫富ともなつて、人から指弾されるばかりでなく、みずからをも損うことになるのである。

世をあげて権利の主張に狂奔し、義務の履行を懈怠しがちな今日この頃、この枯淡な老政客の述懐は、われわれ後進の人生行路にとって、不滅の道標といふべきであらう。

(昭四〇・一一・一〇)

四 庶民と歴史

私も去年の正月は喪に服し、謹慎しておりましたが、今年はず元日に家内とともに宮中に参内し、両陛下に年賀の御挨拶をいたしました。

今年の年賀では、勲章をつけた人が散見されました。一昨年、政府は生存者叙勲を復活し、七十歳以上の老齢の方に、勲章を差上げることにしたからでしょう。

古来、賞罰を厳正にすることが、政治の要諦であるとされております。ところが、明治から今日まで、大臣とか將軍とかいうものが、高い位階勲等にあずかる例が多かつたわけです。今回復活した叙勲には、そういう色彩が薄れて、地方政界、実業界、学界、教育界、芸能界等の功労者

も多く受賞の光榮に浴されたことは、結構なことであつたと思います。

それでもなお、政界や官界の功労者が多く受賞しておられる例が目立ちます。もつと深く、もつと広く、かくれた功労者を見つけて出す努力が要るのではないかと思ひます。

最近、私はアイリーン・パウアの『中世に生きた人々』というフランスの本を読みました。そこには、中世の主婦、尼僧、旅行家、農夫、織元、商人等の感情や生活、思想や労働が、その實態に即し、生き生きとえがかれております。由来、歴史というものが、これまで主として政治家と軍人に象徴されるような選ばれた「指導者」の活躍をえがくことに主眼がおかれていたのですが、この本はそのことに對する一つの抵抗であると思ひます。

指導者は何も蠶を喰つて生きていたわけではなく、その活動と生活を支えたものは、多くの名もない庶民の力であつたはずで、指導者の統治に對する讚美と嫌惡、無關心と反抗というやうなもの、これら名もなき人々の生活の中に織りなされていたことでしょう。また彼らが築き上げた秩序や彼らの示した美しき行ないや慈悲の心は、それ自体、尊いものであつたと思ひます。

この庶民の感情や生活に照明を与えるのでなければ、本当の歴史、その名に値する歴史にはならないはずで、叙勲という大切な國事も、そういう意味における本当の歴史の担い手に、照明を与えた上でなされなければならぬと思ひます。

かつて、本欄で私は、民主主義というものは、「すべての人を通ずるすべての人のためになるもの」でなければならぬことを、イタリアの先哲マッテニーの言葉を引用して指摘しました。民主的社會においては、すべての人がそれぞれ正当な市民権を与えられるものでなければならぬのです。門地や閥歴や財産、さらには皮膚の色や、背の高さや頭腦の優劣に捉われず、それその人が、それぞれに理解され、尊重されなくてはならないものです。民主政治はそういう信条に座標をおいての工夫でなければならぬものです。それは言うに易く、行なうに難しいものです。

その道はけわしく遠いものがあります。しかしわれわれは、敗戦の代償として、この民主主義を道標として撰択することに決心した以上、最早、後退することができません。辛抱強くもろもろの困難を排除しながら、この道を前進しなければなりません。それがすべての人々の倅せに通ずる道であると決心したからであります。

われわれをめぐる家庭、社会、公共団体や国家と自分とのつながりをたぐってみると、何と多くの問題が民主主義の光に照明された説明を待っていることであるか。しかし、焦ってはいけません。興奮してもいけない。序に順ってすべての事を処理してゆかねばならないわけです。大局に対する着眼を誤ってはいけないが、小局の処理にまごつくことはいつそう許されません。民主

主義というものは、本当はきびしい格律であることに、もう一度思いを新たにしようではありませんか。

まず相手の立場に対する理解と尊敬を頭において、事の処理に当るうちはありませんか。自分の判断や行動が、相手の門地や閱歴、地位や財産、身体的美醜等によつて曇らされておりはしないかを、まず反省してみようではありませんか。自分の意志が、みずからの貪欲や虚栄心の虜になつてはいないかを、まず吟味してかかるうちはありませんか。市民の名譽と栄光のために。

(昭四一・一・一〇)

五 四季の教訓

三月を迎えて「いよいよこれから春だ」と思ったのも束の間、いつの間にか桜も散つてしまい、野山は滴るような新緑に包まれてきました。私の手帖にする予定表は五月の分が順次埋められつつありますし、ポツポツ六月の予定もとび出してきております。水ぬるむ六月を越せば、灼熱の夏がまいります。かくて四季の運行には一瞬の停滞もためらいもありません。

春日はうららでかつ柔和であります。これは仁慈の徳を象徴しております。冬眠から解放された万象は、大いに羽根を伸ばして、生の躍動をはじめます。その光りは新鮮で希望に満ちており

ます。夏の雲は勇渾で精力的で、勇氣の貌を表します。解放された生命力を、根底から焼き尽さんほどの勢威をたくましくうたします。

秋の日は澄明で、思索と反省の姿を示します。それは活動の後にくる休止であり、その結果に対する反省を喚び起します。われわれに内向的な沈潜を求めるものであります。冬の雪は清潔で、聖哲のもつ高風を教えてください。しかし、それは同時に新たな出発とこれに対する準備を要求しております。伸びる前の屈する時期であるといえましょう。

四季の運行はかくてその歩を止めることがなく、正確で堂々としており、われわれに多くのことを教えてくれます。

「四季皆我師也」とはこのことを申すのでありましょう。しかし、われわれの生もまた一瞬の停滞があつてはならないのであります。進む時もあれば退く時もあり、活動の日もあれば休息の夜もあり、得意の朝もあれば失意の夕もありましょう。ただ生に対する純一なる誠実をもって、堂々これを買けば、そこに本当の生命力が想像を絶する勢いで湧出てくるものと確信いたします。

六 思想は高く

私ども日本人の生活は、最近大きい劇的とも思われる変化を経験し現にその渦中にある。衣食住はいずれも急速に近代化されつつある。交通機関の発達はいずれも生活空間を著しく拡大させ、国内外にわれわれの生活の行動半径はぐんぐん伸びてゆきつつある。

冷暖房装置は、暑さと寒さを人工的に回避させ、促成栽培の技術はいつでも四季の幸を食膳に運んでくれる。貿易と技術交流の拡大は、われわれの生活の基盤を世界的のものとして、その内容と水準を革命的に変えつつある。医療の機会や施設、さらに新薬の発見も目ざましい整備と進歩をとげ、日本人の平均寿命はすでに先進諸国と比肩できる状態になった。教育の機会も空前の拡充を見つつある。

数年前までは予想もつかなかったことが今では現実となりつつある。そのことはいいことである。たしかにいいことにちがいない。文明の恩沢は、恵まれた一部の特権階級の独占から解放されて、万人のものとなりつつある。このことは結構なことである。また本来そうあるべきものでもあろう。

しかしここで一考に値するのは、果して現代の人々が、これで満足しておるかどうかである。自分たちの生活に、新たに与えられた便宜と時間の余裕を、果してよきことのために費やしてお

るかどうかである。もっといえば、自分たちがそれにより果して人間として向上し充実し進歩しておるかどうかである。

アメリカは世界で最も富強な国である。アメリカ人の生活は、少なくとも日本人のその五、六倍の水準にあるといわれておる。しからばそのアメリカ人にとって、生活上の不満が日本人に比べて少ないかといえば、そうではないようである。彼等は日々強い欠乏感を感じておる。学者はそれを「豊富の中の貧困」といつている。

このように生活の向上と進歩は、必ずしも精神の渴きをいやすものではないことを示しておる。西洋の諺に、

"Simple life and high thinking "

というものがある。高い思想はむしろ簡素な生活と同居するものであるというのである。便宜な生活の環境はそのこと自体結構なことである。ことさらにこれを拒む必要はない。しかしそれは、あくまでも手段であつて目的ではない。われわれの目的は、高い思想を追い求め人格の陶冶に精進することである。また、そのことのみが本當の人生の悦びというものである。

七 静かなる革命

年が改つて、諸君も希望に満ちた未来を展望し、いつその決意と勇氣を奮い起しておられることと存じます。

よく「今年もいい年であるように」という挨拶が、年頭に當つて交されるのが常であります。しかし「いい年」は座して恵まれる贈物ではなく、各人の真剣な努力と精進があつてはじめて、その扉が開かれるものだと思います。場合によつては、せつかくの努力と精進にかかわらず、今年はずしも「いい年」といえないような結末にならないとも限りません。

そこで、いい年とか悪い年とかいう判定の基準が問題になってきます。それは健康の度合や、収入の多寡で判定することもできます。また、就職や入学の成敗、昇進や昇格の有無で定めることもできるであります。さらには家族や友人をどれだけ悦ばせることができたか、よつて評価することもできるはずです。もとよりこれらのことは、どれをとつても大切であり、どつうい物さしで計つても、諸君にとつて、今年はいいい年であるように私は希望いたします。

しかし、それだけでは何か物足りなさを私は感じます。本当の幸福とか成功というものは、いつたい何かという反省があるからであります。本当の幸福とか成功というものは、他の人々がそれをどのように評価してくれようと、自分自身が心から満足と誇りをもてるものでなければなら

ないからです。みずからの満足と誇りは、みずからがみずからに課したノルマ 仕事であれ、スポーツであれ、読書であれ、小さい親切であれ、日常のわれわれの生活に対してみずからがみずからに課したノルマ が果してどれだけ完遂できたかにかかるように思われます。そしてそのことが、各自の本当の幸福とか成功を決定する鍵ではあるまいかと思えます。

みずからがみずからに課したノルマの完遂は、人がそれに対しどのような評価を加えるか、さらにはよしそれが他人からみて必ずしも成功であるとみられるかどうかにかかわりなく、自身自身に大きい愉悦と満足、自信と誇りをもたらすものであります。その時にわれわれは人生に対する本当の生きがいを感じるものであります。そしてその愉悦と満足、自信と誇りは、自分自身のためにみずからに課したノルマが完遂できた時よりも、人のため社会のため、地域社会や国家のために、すなわち他者のためにみずからに課したノルマが完遂できた時に、より大きく深いものがあります。何故ならば、みずからの欲望は無限であり、どこまでいっても欲求不満は続くものですが、他者に対する親切や貢献は、それがいかに小さくとも大きい喜びの源泉になるからです。かくして諸君が本当の悦びと誇りをみずからのものにすれば、諸君の周囲が明るくなります。周囲の人々が諸君の明るさに触発されて、生きる悦びを味わうようになります。そこに静かではあるが、小さな革命がおこります。資本主義も共産主義も、本来、社会から自分や自分の属する

集団が何を獲得すべきであるかということをもっともらしく理由づけようとする哲学でありま
す。そういう哲学からは闘争は生れるけれども、本当の幸福を生む革命は出てまいるものではあ
りません。どこまでいっても不平と不満があるばかりです。本当の革命は、みずからに愉悦と誇
りと満足をもたらすものでなければなりません。そしてそれは、他者に対する自分の献身にかか
つておるものです。

今年には眼にみえないところで、諸君は、何からでも、このささやかな革命的試みをはじめてみ
ようではありませんか。そうすれば人生の宝は、かくして諸君の身辺にいくらでもあることを発
見できるでしょうし、生きることの愉悦をしみじみと感得することもできることでしょう。

(昭四一・三・五)

八 成長か安定か

池田政権のもとにおいて、幸か不幸か日本経済は空前の躍進を遂げた。雇用の構造は大きい変
貌を来たした。農村人口は急激に減少し、東京や大阪周辺は異常な過密人口を抱え、多くの新し
い社会問題を生んだ。消費者物価は根強い騰勢を示し、多くの熱い論議を呼ぶに至った。その反
面、賃金はおしなべて大幅の上昇を見た。とりわけ初任給は大幅に引上げられ、中小企業従業者

と大工、庭師、理髪屋、家事従事者、サーヴィス関係者など組織外の労働者の賃金は、より急激に上昇した。労働力の不足は、都鄙と職域を問わず目立ってきた。消費生活やレジャーの状況は、根本的な変化を経験するに至った。宿命的とまでいわれていた経済の二重構造は、解体の方向に進み、社会の底辺に日がさしてきた。

それは正に狂乱と怒濤の数年間であった。その変革は正に革命的で、日本歴史の創始以来空前のものであった。その速度と振幅があまりにも大きかったために、多くの人は静けさにノスタルジアを感じ、均衡を求め安定をとり戻したい衝動に駆られた。それも無理からぬことであった。「糞あじぶに懲りて膽なますを吹く」というのはこのことをいうのであろう。そして「安定成長」とか「安定成長」とかが、経済政策の指導理念として分別顔で取上げられてきた。

しかし安定と成長とは、本来相容れない概念である。安定と均衡からは絶対に成長は生れてこない。逆に成長と発展の過程には、絶対に安定ということはない。もともと安定と成長を両立させることは、到底できる相談ではない。王選手の一本足は、それ自体安定の姿ではない。しかしその体勢の中から、彼のホームランは生れるのである。もし彼が安定したフォームで打撃をしようものなら、それは凡打に終ることであらう。

世の中に歪ひずみという言葉がある。この文字を分解すれば不正ということになる。いやな言葉であ

る。ひずみということば、成長を生むために通らなければならぬ不均衡の状態をいうのであつて、これは不正でも何でも無い。われわれは、遠慮なくこの不均衡をつくり出し、その克服を通して次の成長をわれわれのものとしなければならぬ。人間が成長を欲する限り、われわれはそのことを覚悟しなければならぬ。そして前進しなければならぬ。不均衡を生みおとし、それを克服しつつ、前進を続けるところに人生の名に値する人生がある。その無限連続が人生の醍醐味であるといえよう。次の時代を担つ青年までが、妙に分別じみた老人趣味に陥つてはいけない。青年のためにも、日本のためにも、大きくは人類の前進のためにも、それは惜しいことであるといいたい。